2024年(令和6年)度

特定非営利活動法人リフ超学校

事業報告書

総括

（事業年度：2024年4月1日～2025年3月31日）

団体として12年目、特定非営利活動法人(NPO法人)として2年目の事業を実施、完了した。事業内容自体は任意団体時代から大きく変わることなく、定款の示すとおり。

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業

2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う教育事業

3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業

4. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

を実施している。いずれもミッション「地域で活きる人材を育成する。」「正直者がバカを見ない地域社会を実現する。」に基づき宮城県内や利府町内において町民及び各主体の自己実現という角度から地域の活性化を目指すものであり、またそのような仕組みや機会創出に町ぐるみで苦慮する状況にあるため、これを地域課題として先進的に行っている。しかし、医療や貧困課題のような活動分野のように、今日・明日に誰かの命が失われるような緊急性の高い課題ではないため、地域課題としての認識、周知に相当の創意工夫が必要であり、素早い広がりを見せることは依然として容易ではない。

しかしながら、昨年度より団体をNPO法人とし、これまでと異なる社会的責任や信用を負い、また関わるステークホルダーの拡大も見られるため、ゆるやかもしくは現状維持に留まることもあるが、ミッション達成への歩みは進んでいる。

今年度、最も課題としたのは「基幹事業の活性化」であった。特に市民活動研究会事業では中間支援を核とするこの法人の取り組みの本丸であり、市民活動の促進や市民協働のまちづくり実現に対して当事者の生の声で合意形成を育む活動ではあるが、”生の声”を集めることが難化傾向にあり、研究会の運営スタイルの刷新が迫られている。

一方で教育機関やメディアからの相談や問い合わせ、取材、講師派遣など法人へのアプローチは今年度もあり、活動の周知や「メニュー」となるものの拡大につながった。また、行政との協働事業も少しずつ始められたことは大きな進歩と言える。

事業報告

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業

（１）利府町市民活動研究会

【趣旨】

2024年現在利府町内では市民活動やNPOの中間支援なる仕組みを公的に有していない。これにより市民協働のまちづくりが停滞する部分を促進に転換させるべく、2021年度から本事業を行い、現在の町内外活動者/潜在活動者のコミュニティを運営し、情報交換や合同研修、ケース検討の場として、本来のそれぞれの団体活動運営の一助と位置づけ、将来的に行政や企業等他セクターを巻き込んだ協働のまちづくり目指している。

【実施結果】

今年度も、市民活動研究会は隔月による対面でのケースワークと業務共有ツール「Slack」を用いたオンラインコミュニティ(団体間の日頃の情報交換や親睦、リソース共有を果たす機能)を並行した。また昨年度からの長期目標として、これまで利府町内で公的に有していなかった市民活動促進や市民協働促進の指針・ガイドラインの提案書に値する共通認識明文化の策定を示した。対面でのケースワーク内容は下表のとおり。今後は冒頭に示したとおりより多くの”生の声”で合意形成を続けるための対策を採る必要がある。そのために、市民活動研究会をリフ超学校という組織のみで運営する形からステークホルダー(主に他団体メンバー)による運営に転換し、各回の企画のテーマやネーミング、呼びかけの文言にさらなる創意工夫を加えることとした。

実施日	実施場所	参加人数	内容
5月21日	利府町文化交流センターリフノス	11	テーマ「市民活動とはⅠ」 新年度にあたり、これから市民活動を始めたい方や行政職員の参加もあったため、あらためて「市民活動とは」一般論してどのように語られているかを全体で共有し、その後グループ毎に「市民活動とは」を問うディスカッションを行った。結果、市民活動とは ・命をつなぐ活動。 ※生きる、死ぬ、怪我・病気等の健康面のみを指すのではなく、一人ひとりの「幼少期はこう生きたい」「思春期はこう生きたい」「青年期は、中年期は、シニア期は…こう生きたい、暮らしたい！」に寄り添い、その寄り添えるベストパートナーにつなぐ活動。 ・誰もが活躍できること。 つながり合うこと(で困りごとの解決や喜びの共有を図る)。問題を協働で解決すること。 という総意が得られた。
7月30日	利府町文化交流センターリフノス	3	テーマ「市民活動とはⅡ～SDGsの裏読み～」 冒頭でSDGsのオフィシャルである国連が何を謳い何を目指して策定したものかを確認し、ディスカッション。SDGsについてはその”ローカライズ”の難しさを示す意見が多く「コマーシャルの道具(表面的な活用)になっている。」「人間の心理として、自らが策定に関わらなかったルールやガイドラインを遵守したり推進しようとは強く思わない。」「ふわっとしている。国際目標という距離感を感じる。」「SDGsが生まれる前から相当する活動に長年取り組んでいる功労者たる方たちもいる。」など意見があり、あくまで国際指標に全員が適応するのではなく、参考として応用し「SDGsに先んじて、自分やその周りのことを持続可能にする目標をつくろう！」という結論に落ち着いた。
9月17日	利府町文化交流センターリフノス	4	テーマ「市民活動とはⅢ～湧き立つもの、私益・共益・公益～」 冒頭で「私益・共益・公益」辞書の上での意味合いを確認し、果たしてこの3語が個別独立したものなのか、密接に関わり合ってるのか検証する余地があると示された。 議論の進め方として参加者から提案があり、私益・共益・公益を、自助・共助・公助と照合する議論を行った。結果、公益と公助に特に差異が見られ 公助＝行政の裁量で一方向性に支援やサービスが施される。 公益＝多様な主体による双方向性で新しい価値や行動を生み出せる という点が著しかった。また「私益・共益・公益」は一様に区別することが難しく、私益の余剰が共益となり、共益の余剰が公益となる構造も合意できた。
12月10日	利府町文化交流センターリフノス	3	テーマ「2024大ガス抜き大会」 市民活動や町民、参加者がそれぞれ活動や普段暮らしについて抱えている「モヤモヤ」を発散し、皆で共有する会とした。その中の共通意見や創意として、この市民活動研究会自体をもっと活性化したいという総意に至った。
3月15日	青山二丁目集会所	13	新企画：Coffe「しゃべってみっぺ」 「総括」の頁にて示したように基幹事業の刷新が迫られる中、運営体制をリフ超学校での組織マネジメントからステークホルダーマネジメントに拡大した。具体的にはリフ超学校を事務局とし、運営メンバーに他団体の代表やメンバーを迎えた。内容は研究会の原点にもどり、至ってシンプルな交流の場としそれぞれが暮らしや活動のなかでの困り事やPRしたいことをハードルなく自由に語らえる場を、飲食と世代間交流を伴いながらフランクに行うことにより、意見を汲み取った。また対象を絞らず、参加のハードルやバイアスを一切取り払うため「市民活動」という語は一切用いなかった。小学生から70代まで幅広い層が参加した。市民活動に関わっている参加者も関わっていない参加者も一緒にテーブルを囲んだ。

（２）利府町寺子屋

　2022年度の市民活動研究会にて「ケース検討会」を行い、集会所の利活用やこどもの居場所づくり、多団体協働プロジェクトという複合した趣旨をもって発足したモデルケース。昨年度から準備を重ね、2022年度2月より集会所等を用いた居場所づくり活動を行っている。

【実施結果】

実施日	実施場所	参加人数	内容
4月21日	森郷森林組合事務所	5	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、牛乳プリンづくりの調理実習、試食交流を行った。
5月19日	野中一部公民館	10	前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、ボランティアの持ち込みレクリエーションとしてフラワーアレンジメント体験を実施した。
6月22日	森郷森林組合事務所	7	初めて中学生の寺子屋を開講した。前半町内及び東北大生等による大学生や、地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。特に期日の近い定期考査に向けての学習を行った。適宜、ボランティアからの差し入れ(おにぎりやお茶)などを摂取し休憩を取りつつ、大学生と将来の学校選びについてのコミュニケーション等も行われていた。
7月27日	青山三丁目集会所	7	小学生のクラスを開講。新しく青山地区にに拠点を確保し実施した。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、かき氷の自作、試食、そして地域のボランティアの持ち込みレクリエーションとしてビーズアート制作体験を実施した。
8月17日	森郷森林組合事務所	5	中学生のクラスを開講した。前半町内及び東北大生等による大学生や、地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。特に期日の近い定期考査に向けての学習を行った。適宜、ボランティアからの差し入れ(お菓子やお茶)などを摂取し休憩を取りつつ、大学生と学校生活や夏休みの過ごし方についての雑談も捗っていた。
9月21日	野中一部公民館	5	小学生のクラスを開講。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、利府町の基幹産業である利府梨についての講話や計量クイズ、食べ比べ、試食等を行い、地域の一次産業に触れた。

10月5日	森郷森林組合事務所	2	中学生のクラスを開講した。前半町内及び東北大生等による大学生や、地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。特に期日の近い定期考査に向けての学習を行った。適宜、ボランティアからの差し入れ(お菓子やお茶)などを摂取し休憩を取りつつ、中学生と大学生がお互いに試験対策のコツやルーティンについて情報交換・交流した。
11月9日	青山三丁目集会所	6	小学生のクラスを開講した。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、サツマイモについての講話を聞き、その後でスイートポテトの調理実習、試食交流を行った。
12月21日	森郷森林組合事務所	7	小学生のクラスを開講した。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、季節にちなんだクリスマス会を実施。パンケーキの調理実習や試食交流、そしてスタッフがサンタクロースに扮し、プレゼント(歌とお菓子とメッセージカード)を提供した。
1月18日	野中一部公民館	4	小学生のクラスを開講した。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。後半は、調理実習でおはぎづくりと試食交流を行った。また、室内で風船遊びやシャトルラン等も実施した。
2月9日	野中一部公民館	6	中学生のクラスを開講した。前半は教職経験者や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。特に期日の近い定期考査に向けての学習を行った。適宜、ボランティアからの差し入れ(おはぎやお茶)などを摂取し休憩を取りつつ、スタッフと中学校で学習する内容の将来的な活用法や公務員の働き方等の雑談した。
3月15日	青山二丁目集会所	8	小学生のクラスを開講した。前半は大学生や地域のボランティアのサポートを受けながら机に向かい集中して持込教材の自主学習を行った。中盤は集会所に隣接する公園で外遊びするチームと、集会所室内で過ごすチームに分かれて過ごした。集会所室内に残った大学生が女子学生だったため、高学年の女子児童は思春期の話題等も話せたようだ。最後は全員でお好み焼きとホットケーキを焼き試食した。お好み焼きに用いた野菜は町民の方かたの寄贈であり、参加児童も運営側も共に旬の美味しさと農産物のありがたみを味わった。

【特記】

プロジェクトそのものを多団体協働として立ち上げたため、第一義的なこどもの居場所づくりとしての機能も果たしているが、この寺子屋活動自体が地域の活動者または潜在活動者のハブとして二次的な効果を生み出しており、協力団体として現場に関わる団体や個人ボランティアは増えてきている。特に今年度は中学生クラスの寺子屋も開講し、仙台圏の大学へもボランティア募集をかけ、昨年度以上に大学生がボランティアとして関わった。小学生の寺子屋では新しく、青山地区での活動を開講した(青山2丁目・3丁目集会所)。現在は4拠点を利用可能としており、参加する小学生も学年や学校が異なる児童同士の交流が盛んになっている。今後も地域の施設の利活用とともに活動内容を考えたい。

またこの活動費は今年度より参加児童から徴収する参加費を無償とし、町民や他団体からの寄付金、イオングループ「黄色いレシートキャンペーン」の助成、「公益信託仙台銀行まちづくり基金」の助成を受けながら活動を継続している。

2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業

（１）リフ超学校インターンシップ

【趣旨】

宮城県利府町では地域課題として若者(18歳～20代)の転出意向が顕著であり、行政、企業その他地域一般では若者を既存の各主体の組織や事業に”呼び込む””巻き込む”ことに重きを置いている。対して当団体では、”呼び込み””巻き込み”の前提として若者が「学ぶ」「遊ぶ」「働く」「住む」「集う」という「受け皿」が必要と考えている。そのために2019年度は若者同士の20代交流会を実施し、2020年度のコロナ禍以降、「集う」ことが困難な状況下になってからは、若者(特に学生)ひとりひとりの内省を支える伴走を行うため、「働く」の支援としてリフ超学校インターンシップを行っている。学校の求人票や大手求人サイトには掲載されないような地域性に富んだ事業所から協力を得て、1日ないし数ヶ月のインターンシッププログラムを実践することにより、生きることを哲学的に考える一助として機会を提供している。

【実施結果】

今年度は昨年度に続き、「企業セクターとのネットワーク」構築が難航しプログラム開発が乏しかったため、インターンシッププログラム実施はなく、キャリア相談のみにとどまった。

プログラム件数：0

実施期間	実施者	受入事業所	コーディネーター	内容

（２）キャリア相談

相談件数：2件

相談者層：大学生

相談概要：将来、音楽関係の業界で働いてみたい(2名とも)。

3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業

（１）RIFU ROCK FEST.

【趣旨】
利府町は近年の行政セクターと企業セクターのサービス拡充が飛躍的であるが、市民との関わりにおいてはサービスの提供者と享受する側との二極化が進むという側面があり、次の時代で市民協働のまちづくりを実現するにあたり、市民ひとりひとりが社会との関わりや自己実現を目指す主体性を育む必要がある。また主体的に社会活動や文化芸術活動に勤しむ市民の努力が露見される機会が多く必要であるため、当団体では2017年度より、その市民の努力を露見する場として、特に「音楽×まちの賑わい」という観点から本事業を行ってきた。年度ごとに多様な個人・団体が実行委員として活躍しており、その層も学生や教育関係者、市民活動・文化活動実践者、その他一般の町民と多岐に渡っている。
その中で、本事業は

1. コロナ禍の長期化において失われた対面での人材交流の機会を創出すること

2. 利府町を文化活動、社会活動、経済活動の各領域において、だれもがはじめの一歩を踏み出せるチャレンジングな地域へと社会変革するため、この3領域のチャレンジャーに対して自己表現、自己実現の機会を創出するとともに、特に若い世代の自己肯定感、自己重要感の醸成すること

を目指す。

【実施結果】
昨年同様、本事業(イベント)に対して企画運営を行う実行委員の募集から事業が始まった。昨年と同じく、町民のイベントやサービスに対する主体性(能動性)を育むため「5名以上実行委員希望者が現れなければイベント自体を実施しない」という制約を設け10月1日から同月末10月31日までに8名の実行委員が集った。8名中7名が昨年度からの継続参加だった。継続して関わった実行委員が多かったため、各小班での企画や活動も自主性や活発化が見られ、実行委員組織が昨年度にまして成熟様子がうかがえた。

会場選定は実行委員が経験値を活かしやすく自己有用感を感じやすくする目的と実務のスリム化、施設の利便性を考え、今年度も利府町総合体育館サブアリーナとなった。
実行委員会は＜音楽＞＜フロア＞＜広報＞のチーム制とし、基本的にはチームごとに日々の準備活動を行った。月に1回の全体ミーティングでそれぞれの企画運営担当箇所の進捗や他のチームへの協力要請等を行った。
音楽チームは、かねてからの周囲からのニーズ「若者や地元の人を増やしてほしい」という声に応えるため、今年度も若者に出演権のある「U-20枠」、地元の文化活動者に出演権のある「地域枠」、その他誰でも参加ができる「一般枠」を設置した。フロアチームは出展者が心地よく活動できる視点と、チームメンバーがライフワークバランスを取れる負担の分量という視点の両面から募集枠を昨年度の20から15へと変更し募集を行った。広報チームは効果的なチラシ活用を行い、メインビジュアルは地元の高校生が描きテキスト入れはプロの編集者が行うという合作を今年度も達成した。また広報チームに新しく加わった実行委員の提案でバックドロップ(横断幕)を新規で購入する、利府町や近隣自治体の広報誌にお知らせを掲載するなど、新メンバーのスキルやアイデアを活かすこともできた。

当日は場内の様子は前述の出演者・出展者で賑わい、昨年度比として若干来場数減は見られたものの、目視のみでもわかるほど多くの来場者で賑わった。広い会場を使用したことで単純な出演者・出店者のPRのみならず、実行委員、当日ボランティア、来場者まですべての属性が群像劇的に相互交流し、ネットワークづくりを行い、新年度の自活動がステップアップするための足がかりとしていた。

RIFU ROCK FEST.2024			
実施日	実施場所	参加者数	内容

3月29日	利府町総合体育館 サブアリーナ	実行委員 8名 当日のみのボランティア 3名 出演者 8組35名 出展者 15組19名 協力者 1社2名 当日来場者 約250名	● 若者が演奏する「U-20枠」、地元のバンドやアーティストが演奏する「地域枠」、その他誰でも参加できる「一般枠」の演奏者によるライブ演奏8組。 ● ライブ演奏を体育館の広い空間を使って彩る物販・ワークショップ・展示・等の出展者15組。

3. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

（１）各種情報発信

【実施結果】

ホームページ、SNS、紙チラシを活用し、年間を通して、自団体の活動のお知らせ、参加者募集や各イベント・プロジェクトの実施結果や分析をレポートした。新しいステークホルダーの獲得、各事業や市民活動そのものへの参画や事例の周知として機能させた。

また、SNSを活用し町内で活動する他団体の活動現場に赴き、その様子を発信した。町内各所に周知することはもちろん、NPOの公的中間支援のない町として、その町内でも市民活動が存在することを町外、県外に周知するための機能とした。

（２）各種相談

【実施結果】

他団体や個人活動者、潜在的な市民活動者からの活動相談や受益者の相談、および当団

体が市民のだれもが参加できるプロジェクトとして稼働させているものへの参加希望の相談、受益者からの相談、行政や公共施設指定管理者、メディア掲載・取材の相談が寄せられた。そして今年度より支援対象者を地域コミュニティ組織にまで拡大し、2つの町内会から行事運営の伴走支援要請があり、実施した。また、『地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業』と連動する学生や若者からのキャリア相談、学生生活や人間関係の相談も寄せられた。相談件数は計26件あった。

　相談に対し代表や理事を中心とした当団体スタッフが対応し、助言や適切な主体へのマッチング等を行った。

相談件数：45件57名

相談者層：学生、市民活動団体(または個人活動者)、行政、企業、受益者、町内会、メディア

相談概要：市民活動運営相談、地域コミュニティ組織の行事運営相談、他セクターと市民との協働についての相談、他セクターから見た市民活動の定義・意義に関する相談。受益者からの日々の困り毎。学生の卒業の進路選択について、地域や社会や仕事を少しでも体験できる機会について、学校生活の活用法についての相談など。

（３）行政との協働事業

【実施結果】

昨年度に引き続き、行政の担当課(利府町町民生活部生活環境課町民協働係)とのパートナーシップやコミュニケーションを密とし、協議・協働のなかからいくつかの市民活動支援活動を行った。

① 利府町庁舎エントランスホールへの利府町町民公益活動団体(要登録)専用のチラシラックの設置

② 利府町HP内への利府町町民公益活動団体(要登録)紹介ページの設置

③ 利府町町民公益活動団体(要登録)の交流会

④利府町町民公益活動団体(要登録)の活動を利府役場庁舎エントランスホールにて周知するパネル展(3月26日～4月2日)

利府町町民公益活動団体交流会			
実施日	実施場所	参加者数	内容
9月26日	利府町町民交流館 (利府町庁舎内) 研修室	25	1. 町担当課から一昨年度実施した町民公益活動団体へのアンケート調査結果と分析の発表。新しい市民活動支援策の説明(チラシラック、HP掲載、パネル展構想) 2. 各出席団体からの活動PRタイムと自由交流の時間。 (主催)利府町 (協力)NPO法人リフ超学校

以上。